

かんぎんしんりやうてんぐう
国宝「**歓喜院聖天堂**」(熊谷市妻沼)

平安時代末期に斎藤別当実盛が大聖歓喜天をまつたのが始まりと伝えられる聖天堂は、宝暦10年(1760)に完成した江戸時代中期を代表する彫刻建築です。奥殿を中心に、壁面や各部材は精巧な彫刻で埋められ、置上彩色という高度な技法をもちいながら極彩色の彩色がほどこされました。

棟梁は妻沼の林兵庫正清とその子正信で、幕府や大名、豪商の援助を受けた記録は残されていないため、庶民の力によって再建されたと考えられています。平成15年から8年を掛けて「平成の大修理」と呼ばれる保存修理工事が実施されました。平成24年7月9日、国宝に指定されました。



ひらやまけいゆうたく
国指定重要文化財「**平山家住宅**」(熊谷市榑春)

市内榑春地内の荒川右岸に位置している平山家住宅は、江戸中期に建てられた農家住宅で、昭和46年6月22日に国の重要文化財に指定されました。平山家は、旧樋口村で名主を務めた旧家であり、現在も屋敷周りに堀や土塁が残っています。建物は、桁行九間(東西方向の幅17.4m)、梁行六間(南北方向の幅11.9m)の入母屋造であり、茅葺の屋根を持つ平屋建ての構造です。文化財の民家住宅としては県内最大規模を誇ります。

江戸時代から約10回の改修が行われていますが、昭和50年代に実施された保存修理工事によってかつての様式に復元され、現在に至っています。西・南面は大屋根の下方に庇を重ね、重い茅葺屋根を強固に支えています。これらの庇は低く、東側では人間の肩に届くほどの高さです。吹き抜ける天井となる土間は、四十畳の広さがあり、そこにはカマドが築かれています。右手側には馬を飼うウマヤが設けられています。室内に露出した梁組の素材には、巧みに補整された赤松材などが用いられ、建築構造の緻密さと豪壮な外観が調和した建築物としては国内屈指の農家住宅です。現在では室内にてお茶会やコンサートも開催されています。



きんぎゆうもん
国指定重要文化財「**貴惣門**」(熊谷市妻沼)

屋根の妻側に破風を3つ持つ特徴的な切妻造の門で、聖天堂完成から約100年後の嘉永4年(1851)に完成し、棟梁は林正清の子孫林正道が担いました。聖天堂の建築中、利根川の普請を行っていた岩国藩の藩士長谷川十右衛門は、京都の禁裏大工に師事し、錦帯橋の作事棟梁をつとめた人物で、林正清と親交があり、正清あてに貴惣門の図面を送っています。



市指定有形文化財「^{ねがしけながやま}根岸家長屋門」(熊谷市青山)

江戸時代の根岸家は、甲山村の名主を務めた豪農であり、その面影を残す長屋門は、幅13間、奥行3間、屋根棟高10mを誇ります。建築された時期は寛政年間と伝えられており、屋敷見取図からは敷地内に土蔵5棟、酒蔵1棟、私塾3餘室があったことが読みとれます。また、長屋門の一部には、根岸武香が収集した考古遺物の陳列も行われていました。平成22年に保存修理工事が行われました。現在、長屋門の一部を「友山・武香ミュージアム」として改装し、根岸家の歴史についての紹介展示を行っています。



市指定文化財「^{みしりかんのんやま}三尻観音山」・「^{りゅうせんじ}龍泉寺」(熊谷市三ヶ尻)

平地である市内において独立した山で、眺望もよく、特に南方は視界が開けています。標高83.3m、周囲約850mで、松・なら・くぬぎ等が豊富に植生しています。南麓にある龍泉寺は、真言宗豊山派に属し、本山は奈良県桜井市初瀬の長谷寺です。本尊は不動明王像。観音山の中腹には観音堂が建てられており、そこには千手観音を安置しています。観音山並びに龍泉寺域全体が昭和30年に熊谷市の文化財に指定されました。観音堂の欄間には、江南地域、上新田の柴田家にあった、書院の欄間にも似た彫刻がはめ込まれており、格天井には渡辺華山の絵図作品が一面に見ることができます。龍泉寺が所有する、渡辺華山ゆかりの「松岡格天井図」、「紙本淡彩双雁図」、「龍泉寺本訪瓶録(上写真:龍泉寺絵図)」は埼玉県の文化財に指定されています。



県指定有形文化財「^{かみのむらじんじゃほんでん}上之村神社本殿」(熊谷市上之)

上之村神社は、もとは久伊豆神社といい、社伝によれば応永年間(1394~1428)成田左京亮家時が社殿を再建し、寄進したと伝えられます。本殿は一間社流造、屋根は銅板葺で、軒廻りや墓股(かえるまた)などに彫刻をほどこし、江戸時代前期の簡素で古い形式をとどめています。



国指定史跡「^{みやつかふみん}宮塚古墳」(熊谷市広瀬)

宮塚古墳は、市内広瀬地内に所在し、全国的にも珍しい上円下方墳という墳形をもち、昭和31年に国指定史跡として指定されました。上円下方墳とは、方形の段の上に饅頭のような円形の土盛りがのる特異な形で、県内の例では川越市に山王塚古墳があります。また、全国に目を向けてみると、天皇家や有力豪族たちが採用した墳形で、奈良県の石のカタラ古墳、静岡県清水柳北1号墳、東京都の熊野神社古墳・天文台構内古墳、福島県の野地久保古墳があります。宮塚古墳を含めた埼玉県の2例については、発掘調査が行われておらず墳形を確認していません。



宮塚古墳は、荒川左岸の自然堤防上に立地する広瀬古墳群中にあり、上円部が直径約10m、下方部が西辺24m、東辺17mで、高さ4.15mです。築造の時期は、7世紀末頃（今から1300年くらい前の古墳時代の終わりごろ）と考えられます。

県指定文化財史跡「かぶらやまこじん甲山古墳」(熊谷市青山)

青山地内にある甲山古墳は、全長90m、高さ11.25m、2段築成の大型の円墳と考えられています。『新編武蔵風土記稿』には、埴輪・須恵器・玉類・鏡・太刀等が出土したものの再び埋め戻されたと記されています。築造の年代は6世紀前半と考えられ、墳丘の規模は、埼玉古墳群の丸墓山古墳に次ぐ県内第2位となるもので、全国の円墳の中でも4番目の規模です。



県指定史跡「しおこふんてん塩古墳群」－4世紀から6世紀の時代の古墳群－(熊谷市塩)

塩古墳群は、市内南西部塩地内の丘陵上に所在する、4世紀から6世紀にかけて造られた古墳群で、昭和35年に埼玉県指定史跡に指定されています。

現在75基の古墳が確認されており、4世紀という古い時代の古墳群は、県内でもきわめて珍しいものです。古墳の形は、弥生時代の流れを引き継ぐもので、大小二つの四角形をつなげた形の「前方後方形」と四角形の「方形」をしていて、県内の古墳の始まりを考える上で非常に重要なものとなっています。

平成5年に、古墳の形を確認する発掘調査が行われ、古墳の周りの溝から、埋葬者に供えられたと推定される土器が出土しています。埋葬施設の調査は行われておらず、どのような人物が埋葬されていたのか、詳しいことは分かっていません。



にしべつごいせきてん 西別府遺跡群－郡家とそれを支えた祈り－(熊谷市西別府)

西別府遺跡群は、熊谷市の西部、深谷市境に所在する西別府遺跡、西別府廃寺、西別府祭祀遺跡の3遺跡の総称で、古代幡羅郡家(郡役所)跡である深谷市幡羅遺跡とともに重要な遺跡です。

西別府遺跡は幡羅郡家の一部と考えられ、調査により平安時代(9世紀後半～11世紀後半)の大型掘立柱建物に伴う二重溝区画が発見され、郡家を構成する重要なブロックとの評価を得ています。西別府廃寺は、奈良時代(8世紀前半)に創建された寺院で、建立には幡羅郡家の役人が関わり、経済的・精神的な支えとなっていたと推定されます。西別府祭祀遺跡(右上、現況写真)は、幡羅郡家ができる少し前の古墳時代後期(7世紀後半)から始められた水の恵に対して行ったお祭りの場所で、郡家に付属する祭祀場所として機能し、西別府廃寺の僧侶も関わり祈りを捧げていたと考えられます。

郡家・寺院・祭祀の3つが揃って発見されている例は全国的にも珍しく、岐阜県弥勒寺官衙遺跡群に次いで2例目で、現在国指定史跡をめざして、調査・研究を行っています。



齋藤別当実盛公遺跡探訪遊歩道

一実盛公ゆかりの地をめぐる

旧妻沼町は、昭和53年に、妻沼聖天山の開創800年を記念して、開祖とされている齋藤別当実盛公のゆかりの地を巡る「齋藤別当実盛公遺跡探訪遊歩道」を創設しました。その後、平成8年にリーフレットが作成されるなど、注目を集めてきました。この遊歩道は、歓喜院貴惣門を起点として、歓喜院聖天堂、歓喜院本坊、氷川神社（弥藤吾）、斎藤塚（弥藤吾）、実盛塚（西野）、長井神社（西野）、椎の木（八ツ口、長昌寺）、大我井の杜（妻沼）までの文化財や寺社などをめぐる全長約8kmのコースであり、その他にも寺門静軒が開講した塾舎があった「両宜塾跡」や、善光寺式の「板石塔婆」などの指定文化財を目にすることもできます。



市指定文化財「文殊寺仁王門」（熊谷市野原）

市内野原地内には、「野原の文殊さま」「知恵の文殊寺」として親しまれている日本三正文殊の一つとされる、文殊寺があります。仁王門（市指定有形文化財：昭和32年指定）は東側の県道より入り最初の朱塗りの建物で、建築年代は江戸時代前期、中央間八尺の八脚門で、左右に仁王を配しています。



文化（1804-1818）年間の文人「十方庵敬順」は文殊寺を来訪し、『遊歴雑記』という書物に「仁王門四間ありて仁王尊も馴合て尤よし・・・是より真正面に本堂を見込事凡老町余あるべし」と記しています。

文政11年（1828）には、火災により仁王門以外の七堂伽藍が焼失し、当時の様子を伝える建物は、仁王門と本尊だけとなっています。

毎年2月25日の大縁日は、受験シーズンと重なり、多くの参拝客で大変な賑わいを見せています。

養蚕関連の文化財—「絹産業遺産群」との関わり—（熊谷市玉井）

現在、群馬県にある世界文化遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」は登録を受けて多面的に注目を集めています。これらの遺産群と熊谷は深いつながりがあります。それは天保2年（1831）、旧玉井村で生まれ、日本を代表する養蚕技術の先駆者となった鯨井勘衛（下写真）に関係しています。勘衛は、玉井に「元素楼」という大蚕場を作り、清涼飼育という画期的な養蚕技術を多くの人々に伝習したことで知られています。勘衛によって成し得た養蚕技術の向上が、関東地域での繭生産の増大をもたらし、富岡製糸場への供給を確固として支えたとされています。



その後、「元素楼」は移築解体され、その跡地が「元素楼跡」として市指定史跡に指定されています（右上写真）。また勘衛によって著された「元素楼養蚕関係文書一括」も市指定有形文化財に指定されています。

これら熊谷における養蚕関連の文化財が、世界遺産の一連の動きに対しての一助となっていることは、大変意義深いことであると思われます。



元荒川ムサシトミヨ生息地（熊谷市佐谷田・久下）

世界で熊谷の元荒川上流域だけに生き残ったムサシトミヨは、トゲウオ目トゲウオ科トミヨ属の淡水魚で、成魚の体長は約5cmです。平成3年、この源流部の約400メートルが「元荒川ムサシトミヨ生息地」として県の天然記念物に指定されました。ムサシトミヨは環境省レッドリストでは絶滅危惧IA類（CR）に指定され、絶滅が危惧されている種別です。ムサシトミヨの生態には、15℃前後の清涼な湧水と、水草が適度に繁茂した環境が必須であると考えられています。一年魚のムサシトミヨは、成魚となった雄が水草等で直径3cm程の球形の巣を造ります。その後、雌を誘い込み、巣内で産卵、受精した後、雄が子育てをするという珍しい特徴を有しています。



熊谷市指定有形民俗文化財「愛染明王」（熊谷市下川上）

熊谷市下川上にある愛染堂の本尊「愛染明王」は、時代を越えて保存されてきました。江戸時代以降、「藍染」と「愛染」の関わりから、関東一円の多くの染物業者などが参拝し、額の奉納や修理工事が実施され、庶民信仰の文化遺産として残されています。

宝乗院愛染堂の本尊は、大同元年（806年）、日本一木三体の一体（その他、陸奥国、筑紫国）として造立されたとの言い伝えがありますが、江戸時代に入り秀逸なる仏師の手によって、「愛染明王」が制作されたと推察されます。像高は、髮際高（髮際までの高さ）で約三尺六寸（1.09メートル）を計り、像高1.45メートル。台座と合わせると、半丈六（2.42メートル）を越える大きさです。

仏像の形状は、三目六臂（さんもくろっぴ）の仏相であり、肌色の赤色は実在の日光の輝きを示しています。三目の怒相は三界（宇宙）の悪魔を払う形相を示している。六臂の中において左の上手の拳は、願望を成就することを、右の上手に蓮華を持つのは汚れを払い円満をもたらすことを意味しています。右の手中には五鈷杵（ごこしょう）と、左の手中には金剛鈴を持ち、これらは衆生からの救済を願う形仏相です。左の下手には金剛弓、右の下手には金剛箭（こんごうや）を持つ。これは煩惱などを払い、悲観厭世の妄心を射抜くことを、毛髪の逆立相は魔縁降伏の相を示しています。毛髪の逆立相は魔縁降伏の相を示し、頭頂の獅子冠は、七曜の吉凶逆転を予期させるものです。本像は、近世仏像彫刻の優れた作例の一つであるといった美術的価値をもつとともに、染色業者による愛染信仰の本尊としての歴史的、民俗的資料価値を有しています。



奉納額と尾高家・渋沢家 一愛染堂と世界遺産との関わり

平成27年3月、後に保存修理工事を控えた愛染堂（熊谷市下川上）に掲げられていた絵馬及び額を取り外し、隣接する下川上自治会館に移動した。その際、尾高惇忠が記した奉納額を確認することができました。

額には「共進 成業 唯頼 冥護」と示されており、藍染業を中心とした業界団体から愛染堂に奉納された額であることが判明しました。そして、世界遺産「富岡製糸場」初代工場長・尾高惇忠（じゅんちゅう・あつただ）の号（筆名）である「尾高藍香」の名が確認できました。（サイズ 横：133cm 縦：79cm 厚み：5cm）。額の願主には、養蚕や藍玉の一大生産地だった現在の深谷市域の地名が見えることから、商売繁盛や業界繁栄の祈願を行っていたことが分かります。



熊谷うちわ祭

(熊谷八坂神社祭礼行事)

(熊谷八坂神社祭礼行事保存会)

「熊谷うちわ祭(熊谷八坂神社祭礼行事)」は、7月20～22日の3日間において実施されており、毎年多くの観客者を集めています。祭礼行事の起源は、文禄年間に愛宕神社に合祀された八坂神社での例祭です。現在においても、江戸中期から開始された祇園柱の設置を伴う祭礼行事、江戸中期から開始された神輿渡御、明治後期から開始された山車・屋台の巡行行事、これらの原型が多くのの人々によって継承されています。12の町区が擁する山車・屋台が市街地を巡行する様子は絢爛豪華であり、「関東一の祇園祭」と称されています。平成24年3月30日、市の無形民俗文化財に指定されました。



熊谷市立江南文化財センター(熊谷市千代)

資料は歴史の証人であるとともに、生きた教材であり、「ひと」に感動と理解を誘う貴重な文化遺産です。そこで江南文化財センターでは、楽しく施設を利用できるように「つくる、しる、ふれる」を基本コンセプトとしています。

また本施設は市内の文化遺産として伝えられた「文化財」の収集、保管、調査及び研究を行うとともに、これらの文化財の活用を図り教育、芸術、及び市民文化の向上に幅広く寄与するため、多くの文化財資源の公開も行っております。

所在地：熊谷市千代329番地 開館時間：午前9時～午後5時 休館日：土曜日・日曜日・祝日・年末年始 入館料：無料



熊谷デジタルミュージアム

平成23年10月にリニューアルして開設した『熊谷デジタルミュージアム』では、市内の文化遺産の紹介、情報発信を行っています。コンテンツとして、文化財関連「コラム」の設置、「マップいろいろ」を設置してGoogleMapを利用した遊歩道の紹介、外部リンクでYouTubeに動画の公開を始めるなど、新たな取り組みも進めています。コンテンツ内の「熊谷の偉人」の人物追加、「PDF文庫」の各種刊行物追加、「絵画室」の絵画追加、ブログ「熊谷市文化財日記」への記事投稿等を行っています。今後、江南文化財センターに加え、市史編さん室、図書館郷土資料室、妻沼中央公民館からの情報も加えてコンテンツの充実を図っていきますので、郷土熊谷を知る一助としてぜひご利用ください。



熊谷市立江南文化財センター(熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係)

〒360-0107 熊谷市千代329番地

電話 048-536-5062 FAX 048-536-4575

メール c-bunkazai@city.kumagaya.lg.jp

HP:「熊谷デジタルミュージアム」<http://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/index.htm>

文化財の紹介、ブログ「熊谷市文化財日記」、「BUNKAZAI情報」カラー版などを豊富に掲載

